

第 64 回「言葉の院外処方箋」

『「具眼の士」 ～「Fashion」、「Passion」、「Mission」～』

新渡戸稲造記念センター 長 樋野興夫

2003 年 新渡戸稲造（1862～1933）没後 70 年を記念して『われ 21 世紀の新渡戸とならん』（発行 イーグレイプ、発売 いのちのことば社）が出版された。新渡戸稲造は国際交流の「旧約」（『武士道』1900 年）を書いたが、果たして「新約」は誰が書くのか、との問いかけも目立ってきた。21 世紀の世界の懸け橋をいかに構築するのかが「時代の要請」であり「静思」のときである。所詮われわれには、死ぬときは「壘一枚ほどの墓場」しか残らない。「勇ましい高尚なる生涯」の生き様を見せるしかない。精神的デフレが進む現代、「愉快に過激にかつ品性」を合言葉に忍耐強い外交哲学の提唱でもある。

我が国では、「Fashion」、「Passion」、「Mission」の見分けがついていないのではないと思われる。「世界的通用力」を気にかけるばかりに、大学の建学理念の希薄化と教養の低下にともない、存在理由の希薄化が加速していると思える。学生に魅力を提供する「器量」がないのであろうか。「器量」といえば、「挑太郎」を思い出す。鬼ヶ島遠征の物語は、子供時代、村のお寺の紙芝居でよく聞かされたものである。桃太郎が犬・雉・猿という性質の違った（世にいう犬猿の仲）伴をまとめあげたことを挙げ、世に処する人は「性質の異なった者を容れるだけの雅量」をもたなければならないと新渡戸稲造は『世渡りの道』（1912 年）で述べている。とかく、競争の名の下に、実は個人感情で排斥をする自称リーダーへの警鐘でもある。日本の女性科学者のさきがけである猿橋勝子氏（1920～2007）の恩師は「科学者は知識だけじゃいけない。哲学がなければ」と言ったとのことである。激しく移り変わる混沌とした世界の中で「広い視野」と「確固とした現実認識」と「深遠な歴史意識」をもち、「なすべきことをなしたい」ものである。

初期の癌化細胞はいまだ「行く先を知らない」で過酷な環境にあり、尺取虫のごとく着実に進展していくものが生き残る。外界依存性（アンテナ型）と外界非依存性（羅針盤型）の混在である。アンテナ型は表面に受容器は良く発達しており、豊富な情報量を誇るが非自律的であり、外発的である。内発的で自律的である羅針盤型とは質的に大きく違う。「日本の開化は外発的」（夏目漱石；1867～1916）

)に偏った末の現代の病理現象に通ずる。「学は之を励ますに高貴なる意志の感動を要す。功名を目的として、利益の刺激に依りて智能は永久に發育し得べきものにあらず。我が帝国大学の衰凋は其中に高遠な理想の活動せざるに存す」(内村鑑三;1861~1930)とは教育の現況を展望すれば深く心にしみる。まさに、「世の改革者は自らは改革されないで改革された社会に住むことを望む。よって真の改革は何一つ出てこない」。いつの時代も真の改革者は「正統なるが故にアウトサイダー」である。故に「具眼の士」の「学問歴」が大切になってくる。

この度(2021年7月1日)「津田梅子の推薦を受けて奨学金を得、新渡戸稲造夫妻と共に渡米し、プリンマー大学に学んだ河井道(1877~1953)が創設した恵泉女学園」の9代目理事長を拝命することになった

(<https://keisenjogakuen.jp/message/rijicho/>)。順天堂大学 医学部 病理・腫瘍学の教授(2003~2019)を勤め、「新渡戸稲造記念センター 長」(2019~)の筆者にとっては、「恵泉女学園」理事長とは、「新訳」の「もしかしたらこのときのため」であろうか!

2021年特別講演会



がん 哲学 外来 からの 気づき

二人に一人が、がんになる時代の生き方

講師 樋野興夫 (ひの・おきお)

順天堂大学 名誉教授、順天堂大学医学部病理・腫瘍学客員教授、新渡戸稲造記念センター長。
がん患者の不安や苦しみと向き合い、対話を通して支援する「がん哲学外来」を創設。
全国170カ所でがん哲学外来・メディカルカフェが開かれている。



日時／6月27日(日曜日) 午後2時～4時(午後1時30分開場)

会場／桜ヶ丘キリスト教会

YouTubeからでも参加できます!

詳細は裏面のお近くの教会へお問い合わせください。

講師／樋野興夫(ひの・おきお) 順天堂大学 名誉教授

主催／多摩ニュータウン地域協力教会

